
仮面ライダーウエイブ

ウェーバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーウエイブ

【Nコード】

N7325Z

【作者名】

ウェーバー

【あらすじ】

ある一人の少女『磯貝七海』いそがいななみは家族全員から虐待を受け、辛い日々を送っていた。
ある一人の少年『大洋海翔』たいようかいと彼の家族は誰一人血が繋がっていないが、ただが幸せに暮らしていた。

ある時七海は高校受験の帰りに異世界から来た怪人『ウォーマ』に出会い襲われる。しかし、そこに海翔が現れてウォーマを倒すのだ。
た………

そして海翔と七海の出会いはい互いの運命を良くか悪く変えていくの
だった……。

尚、この小説はエブリスタにも投稿しています。

波の戦子 ウエイブ (前書き)

作者は文才も何も有りませんが、誹謗中傷はいりません。アドバイスはいりません

波の戦子 ウエイブ

1月1日 AM 3:00

ここは日本の何処かの架空の街『海頼^{うみより}』のすぐ側にある『海頼海』の浜辺。

1月と言うせいもあり冷たい風が吹きつけていて、とても寒く、誰もいないが………

そこに銀色のオーロラが現れたそして誰も居なかったはずなのに黒い服を着た青年がいた。

1月18日 AM 8:00

海頼

「大変!………大変!」と言いながら無我夢中で走っている少女がいた。

黒い髪をポニーテールにくくり制服を着て、スニーカーを履いた足を一生懸命に動かしているこの少女の名は『磯貝七海』 中学三年生。

彼女は高校入試に向かっている途中だった。

「どうしよう、どうしよう。」等と言いながら目に涙が浮かばせ試験会場に着いた。

数時間後

「……………」

足下がおぼつかない七海が試験会場から出てきた。

彼女が試験に間に合ったのかと言うと…………間に合っていた。

しかも

「ええつと…………今なんて…………」

数時間前七海は信じたくない思いで高校の教員に聞き返してしまっただ。

「ああーまだ試験開始一時間前ですが……。」

一時間の余裕を持って……

七海はさつき遅刻だと思って自身の限界を超えたスピードで走っていたというのに……

「はあ〜」と溜め息をつきながら七海は自宅へと向かっていた。

もうすることはなく後は春にある中学校の卒業式と合格発表待っただけなのだが……

彼女には恋人はおるか親しい友人もない。卒業式にしても春、合格発表にしても春。

その間をどうやって過ごそうかと思うと少し涙が流れてきた……。

そんなことを思っていたとその時

「わっ!」「きゃー!」

七海は誰かとぶつかってしまい転んでしまった。

「す、すみません……あの大丈夫ですか?」

七海とぶつかった人物はそう言って七海に手をさしのべた。

「あつ！大丈夫です！すみません。ちょっと、よそ見しちゃって…
…あなたこそ大丈夫ですか！？」

七海はさしのべられた手を持ち、立ち上がりながら相手の無事を確認する。

「お、俺は大丈夫です……すみません……ちょっと急いでて」

「ほ、本当に大丈夫ですか！？」

七海はぶつかってしまった相手をマジマジと見た。

身長は160半ばぐらい七海で166だから大体同じぐらいだろう。
いや、2、3センチほど七海より低いだろうか？

黒い髪の毛に多分自分と同じぐらいの年だろうか。結構端整な…
…格好いいと言うよりはやや可愛らしい顔立ちをしている。

服装は冬にしては薄い服装だ。

長袖のシャツの上に一枚羽織を着ているだけだった。

だが、七海が一番目を引いたのは右手に妙なマークがついたアタ
ツシユケースを持っていることであつた……。

「あ、あの………？」

中々、七海がマジマジと見つめるからだろうか、少年はアタツシ
ユケースを見ている七海に心配そうに尋ねた。

「あ。だ、大丈夫です……」

七海は少年の掌を掴んで立ち上がった。

「本当にごめんなさい！本当の本当に急いで……」

少年は七海に向かって何度も何度も頭を下げて謝った。

「だ、大丈夫ですよ。そう何回も謝らなくても……それに、急いでるんですよね？早くいかないと……」

「で、でも………ほ、本当にすいませんでした！」

少年はもう一度頭を下げると大急ぎで走っていった……

七海はその後しばらく歩いていた。

「さっきの子ちゃんと間に合ったのかなあ……」

なんて、さっきの少年のことを心配していた。

ズガァン！！

「な、何！？」

七海はあたりを見渡すと車が電柱に激突して、車からは運転手らしき人が鞆を持って出てきた。

だが、七海にはその運転手が持っている鞆に見覚えがあった……

「あつ、あのアタツシユケース……」

さっき出会った少年が持っていたのと同じものだった。その証拠に同じマークが付いている。

「ひっ！ひいい〜」

運転手の男は何かに怯えているようだ。

車の周りには周りには野次馬が集まってくる。

「どけ！！邪魔だ！！」

運転手は野次馬を押しつけここから立ち去ろうとする。

「フンッ!」

怪物ははさみを振り下ろす

「きゃあ!」

七海は間一髪よけ思いつきり逃げ始めた。

七海は怪物が驚いてる隙に一気にかけだした。

怪物たちはすぐに追いかけるがそんなに動きは速くないようであつという間に見えなくなつてしまった。

「ここまで来たら　キャッ!」

七海は怪物が来てないのを確認するために後ろを見たらまた誰かにぶつかってしまった。

「すつ、すいません! ちょっと急いでて……あつ! 今怪物がいるから早くここから離れた方が　「その必要はない」えっ?」

七海がぶつかってしまった男は七海の言葉を遮った。

「なっ、何ですか!」

七海は思わずくっつかかってしまった。

「何故? 決まってるだろう。」

男はニヤリと笑い。

「俺がその怪物だからだ。」

そう言い次の瞬間男の姿がさっきの大きなはさみをしている手を持つ怪物に変わった。

「あっ……あ……あ」

目の前にいた人間がいきなり怪物に変わり七海は言葉を失ってしまった……

「さあ、そのアタツシケースをよこ　ぶわっ!!」

七海は怪物をアタツシケースで殴り再び全速力で走り出した。

(何なのあいつ等? コレをよこせて……でもこれさっきの男の人が持ってたのと同じ。あの男の人とコレを貰うはずだったあの男の子もあの怪物と関係あるの?)

「おいつ、いてーじゃねーか」

「……」

七海は驚愕した。さっきまで後ろにいたはずの怪物が今、目の前にいるのだから。

「そんなー!!」

「はっ、お前らじゃ解んねーなージャンプしたただけなんてよー!!」

最も怪人態では重すぎるので人間態に一旦戻ったが。

「うつつ……あつ……」

前がだめなら後ろをと思い後ろを振り返るがあこのウジャウジャした怪物も追いついてしまっていた………

「さてとそのケースとお前の命を貰う」

七海はもう足がすくんで動けなくなってしまった。10体近くいるウジャウジャと大きなはさみをした怪物、もう駄目かと思った………その時

「はあ！」

かけ声が聞こえたかと思うと、ウジャウジャの内の一体が殴り飛ばされていた……

「えっ？」

そのかけ声は七海に聞き覚えのあるもので救い主の姿にも見覚えがあった。

「あれ？」

救い主は自分が助けた人物が誰か気付いたようだ。

「ちっきの……」

怪物が、忌々しい物を見るような目でドライバーと呼ばれた物を見た。

少年がそれを手に持つと帯が出てきてベルトとなり海翔はベルトを腰につけた。

少年はアタッシュケースに入っていたサーフボードのに円形の小型の機会が付いていてイルカの胸鰭のようなものが付いたプレートを出して……

「変身！！」

と叫んで、ベルトへ縦に差し込み90°回転させた。

《ride on》

電子音になり少年は波のようなエネルギーに包み込まれた。

「なななっ、何がどうなって。」

七海には目の前の光景が何がどうなってるかわからない。

そしてエネルギーが水飛沫のように散りそこに何かが立っていた

……

「じっ、これは……！」

怪物はその姿を見て驚いていた。

黒い下地で水色のアーマーをつけていて、青いホーン部分もイルカや鯨の尾鰭のような三日月形。オレンジ色の複眼に口はギザギザと鋭いクラッシュャーをしたイルカをモチーフにした仮面ライダーウエイブに……

「ライダーを破壊しろと、言われていたがプロトタイプのライダーシステム・ウエイブ・だったとはな……ふん、所詮出来損ないのシステムだ。行けお前ら」

はさみ怪人はウエイブにウジャウジャをけしかけた

「出来損ないか……」

ウエイブは銀と青の銃・ウエイブレイガンー・を取り出しウジャウジャに向かって撃つ

「クワア!?!」

全員に命中して全員がひるみ、そこにウエイブがマルチブレイガンを銃のプラストモードから剣のスラッシュモードに変え切りかかる。

4体ほど居るウジャウジャ怪人はウエイブに向かって長い爪を出しウエイブに立ち向かうがウエイブはそれをかわし、4体のウジャウジャを何度も何度も切る。

「……………」

ウェイブは左手につけてる小型の機械 - ウェイブローダー - を構えた。

ウェイブローダーを手でスラッシュし、《rider slash》と電子音が発せられる

ウェイブレイガンの刃に青いエネルギーがはしりそのままウジャウジャに突っ込んで行きすれ違いざまに切りつけて行く。

「ガッ……………」

切り裂かれた4体は 水飛沫のとなつて散り消滅した……

「ほお…………… 4体のプランクウォーマを倒すとはな」

はさみ野郎が感心しながら近づいてくる。

「プランクウォーマ……………？」

七海は聞き慣れない単語に首を傾げ、はさみ野郎は続ける。

「プランクウォーマとはウォーマ達を基に生み出された人工生命体だ。だが知能や戦闘力は殆ど無いし、つがいを何組か放っておくだけであつという間に繁殖する。だから俺達は、戦闘員としてこき使っているわけさ」

はさみ怪人はプランクウォーマについて説明するが、七海が怪人の言葉を遮った。

「ウォーマって何？」

七海の疑問にはさみ怪人は答える。

「俺達ウォーマはもう一つの……ネガのこの世界からやってきた……」

「ネガ……？」

質問して答えて貰えば貰うほど疑問がわいてくる上に知らない単語ばかりが飛び交い、七海の頭脳が追い付かなくなってきた。

「随分喋っちまったか……。まあいい……」

だが、ウェイブはいきなりはさみウォーマに斬りかかった。

「ハッ！」

だがすぐにハサミでウェイブレイガンを受け止める。

「固いな……」

「当たり前だ！俺は蟹のウォーマだからな……！」

そして蟹のウォーマ・リバークラブウォーマ・はもう片方のはさみを振り上げるが……

《rider blast》

電子音がした途端マルチブレイガンがブラストモードになりウエイブがジャンプで後退して、青いエネルギーが集注しているマルチブレイガンの、引き金を引いた。

「なっ!!」

マルチブレイガンから青い光弾が発射されリバークラブを直撃した。

「ガアアアア!!」

絶叫と共にリバークラブは思いつ切り吹き飛んだ。

「ふう・・・」

ウエイブはとどめをさすためにローダーの胴部分を引っ張ると、ガチャツとショットガンのポンプ音のような音が聞こえ《ride r blast》と電子音が鳴りブレイガンをリバークラブのへ構える。

「ガアアアア!!」

「えっ?」

雄叫びを聞き、振り返るとリバークラブがもう1体いた。

「新手!?!」

ウェイブは新手にブレイガンを構えると……

「よそ見をしてる場合か!?!」

「!?!」

復活した最初のリバークラブがハサミをスイングする。

「わっ!」

とっさにかわすが、かわしきれずブレイガンを弾かれてしまう。

「あの武器がなけりやおそれることは　ブワッ!?!」

武器を失っているウェイブにリバークラブは襲いかかるが、そこにはウェイブの回し蹴りが命中していた。

「このっ!?!」

リバークラブもハサミを振り回すが、ウェイブは素早い動きで全て避けて連続でパンチをたたき込む。

「ちっ!素手の戦闘もイける口か!?!」

リバークラブは悪態をつき……

「てめー!?!その娘をぶち殺しておけ!?!」

リバークラブは援軍に七海を殺すように命令した。

「……………」

「そこまで落ち着いてられると気に食わねえなあ!!」

リバークラブは、はあつと溜息を付いてウェイブに突っ込んで来た。

「……………はあつ!!」

ウェイブは突っ込んで来たリバークラブに一発、蹴りをお見舞いしハサミを片方を両腕抑え込む。

「いくぞ……………」

ウェイブはリバークラブを突き飛ばし拳を構える……………するとウェイブの拳にエネルギーが集中してきた……………

「はあ!!」

ウェイブは拳にエネルギーを集中させたまま飛び上がり……………

「はあああ!!!!」

降下の勢いもプラスしたパンチをリバークラブに叩き込む。

「がああ……………!!!!」

パンチで吹き飛ばされたりバークラブはよろよろと立ち上がった
が次の瞬間に爆散した。

「ギアアア!!!」

もう一体のリバークラブがウェイブにむかってハサミを無茶苦茶
に振り回してくる。

ウェイブはそれを全て避けキックをかます。

そこにパンチを二発ぶち込みローダーのヘッド部分を押ししてから、
ベルトの右サイドのボタンを押す。

《r i d e r k i c k》

電子音が鳴り、ウェイブは高くジャンプしてエネルギーを纏った
右足でリバークラブに跳び蹴りを放つ

ウェイブのキックがリバークラブの胸にヒットし当たった瞬間激
しい水飛沫が起こる。

「うあっ……、うおおおおお!!!」

激しく吹き飛び、立ち上がったリバークラブは殻が割れた胸を覗
かせながら、水飛沫のように散った……

海頼内某所

ここは何かの研究所の地下。そこにあるモニターには先ほどの戦いが映っていた。

「コレがプロトタイプのライダーシステム、ウェイブ……」

そこにモニターを見ている2人の中年ぐらいの男性がいた。

「はい。ですがしかし……」

その隣にいる男性が、先程の戦闘の映像を見て不思議がっている。

「何か気になることがあるのかね？」

最初の男性が訪ねた。

「ええ、ウェイブの装着者ですが何故この世界の人間がウェイブを……」

「なあに、これに関しては心当たりがある。君は気にしなくてもいい。」

「そうですね。あなたがそう仰られるのなら私は気にしないことにします」

男はそう言うと。「私にも目的がありますから……」

と言いニヤリと笑って去っていった。

部屋には最初の男性が残った。

「まさかここまで早くライダーが出現するとはな……フハハハハハハハ！」

部屋には男の笑い声が響きわり、こう呟いた。

「復讐の始まりだ!!! ウエイブ……いや、『大洋海翔』!!!」

波の戦子 ウエイブ (後書き)

前々からエブリスタに投稿させていただいたものを重複投稿という形で、投稿させていただきました。

下手な文才丸出しですが温かい目で見ていただけたらなと思います。

後、この場を借りて人物紹介をさせてもらおうと思います。

いそがいななみ
磯貝七海

この物語の主人公

家族から虐待を受けているが一生懸命に生きている。性格は明るい
がこれ過去の体験から無理に明るくしている。

主人公と銘打っているもののこの後は出番が無くなることもあるし
読者視点キャラと言っても無理があるかもしれないし、更には仮面
ライダーへの変身予定もありません。

「じゃあ、何で主人公なんだよ!!」って突っ込まれるかもしれないま
せんねえ・・・仮面ライダーに一切変身しない仮面ライダーの物語
の主人公なんて・・・

ただ、作者が主人公要素ゼロの主人公を作りたかっただけなのかな？

まあ、次回はもう一人の主人公でライダーに変身する海翔の紹介を
後書に書こうと思います。

では、皆さんをよろしく………（次元の壁が降りてきてそこに
入って退場……）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7325z/>

仮面ライダーウエイブ

2011年12月24日09時56分発行